

徳川家光治世にみられる社寺整備手法の特徴に関する一考察

The features of the constructing methods of the precincts of temples and shrines in the reign of Iemitsu

○加藤千晶², 重枝豊¹

*Chiaki Kato², Yutaka Shigeeda¹

1. はじめに

徳川家光治世（寛永一慶安期）での数々の巨大寺院の造営については、光井渉により概観が述べられている⁽¹⁾。筆者は独自に家光治世下（以下家光期）で造営が行われた社寺の件数を調べたが、少なくとも 35 件（内 25 件に一部遺構現存）が確認できる⁽²⁾。これら社寺の所在は、徳川家の拠点である地域（江戸、駿府、岡崎、京都）と主要街道沿いがほとんどで、家光期での社寺整備は徳川家の都市拠点整備の一環と考えられる。また家光期造営の社寺の中には、この時期に境内の全体構成に大きな変化がある事例が多くみられる。

家光期での造営と関連する社寺境内の研究は、江戸の都市構造の解明を目的とした建物復元⁽³⁾や、個別事例の検証⁽⁴⁾が中心で、家光期の社寺整備の全容はこれまで明らかにされてない。本稿では家光期において共通して用いられた社寺整備手法の 4 つの傾向について、家光期造営以前の境内構成と家光期での造営内容に関する文献・絵図が残る事例を対象に検証することを目的とする。社寺の境内構成を変質させたこの時期の整備手法の解明は、江戸時代初期の社寺境内・建築を建築史的に位置付ける上で重要といえる。

2. 整備手法と傾向

今回の文献・絵図調査の段階で、家光期の造営内容と家光期造営以前の境内の状況が判明した事例は、日光山、喜多院、東叡山、増上寺、浅草寺、三嶋大社、久能山東照宮、松応寺、比叡山、清水寺、知恩院、仁

和寺、石清水八幡宮である。この内、家光治世下造営で境内構成が変化した事例について整理すると以下の傾向が認められる。

①新堂舎の付加：家光期造営前の中心堂舎や基本的な伽藍構成を残し、新たに複数の堂舎を付加する事例（以下新堂舎とする）。

②二重門・袴腰付鐘楼・輪蔵・塔の整備：境内に二重門（三門や楼門、大門）、袴腰付鐘楼、輪蔵、塔を新規に整備する事例。

③別伽藍の付加：境内の旧主要伽藍は残し、門・鳥居や付属堂舎を持ち独自の伽藍を形成する本堂・本社が境内に加わる事例。

④参道の整備：家光期造営以前から存在した主要参道の他に別ルートで参道を新設・付替することや、既存参道の拡張など再整備をする事例。

以下これらの造営の特徴について、家光期の造営内容から検討を加えたい。

3. 新堂舎の付加

新堂舎の付加は、東叡山、日光山、三嶋大社、久能山東照宮、仁和寺で確認される。家光期造営時の新堂舎の内訳は、東叡山：畿内名所堂舎の写し、日光山：神事・祈禱に関する堂舎等、久能山：日光東照宮に付属していた堂舎（神庫、本地堂等）、三嶋大社：中世存在の堂舎・諸末社⁽⁵⁾、仁和寺：観音院（仁和寺院家）堂舎であり、共通した傾向はみられない。一方境内構成は新堂舎が本堂・本社の周りに点在するように配置されている（図 1）。新堂舎が付加されなかった事例においても浅草寺⁽⁶⁾、清水寺（図 2）、石清水八幡宮で本堂・本社周りに多数の堂舎が点在する構成がみられる。家光期造営以前に多数の堂舎が点在する境内構成をとっていた事例では新堂舎の付加は行われず、再建のみにとどまるとみられる。家康・秀忠主導での造営（慶長一元和期）をみると、本堂・本社、方丈・庫裏・書院ほか主要な建物の造営が中心であり（日光山、増上寺、三嶋大社、松応寺）、家光期造営と比べ多数の堂舎が点在する

表 1. 家光治世下造営社寺一覧

所在地	社寺名	現存遺構	所在地	社寺名	現存遺構
群馬	長楽寺・世良田東照宮	○	愛知	鳳来寺・鳳来山東照宮	○
	貫前神社	○		滝山東照宮	○
栃木	輪王寺・日光東照宮	○		大樹寺	○
茨城	筑波山神社（旧中禪寺）	○		伊賀八幡宮	○
埼玉	三芳野神社	○		六所神社（岡崎市）	○
	喜多院・仙波東照宮	○		松応寺	
東京	上野東照宮	○	岐阜	南宮大社・真禪院・南宮御旅神社	○
	芝東照宮（旧増上寺安国殿）・台徳院霊廟	○		滋賀	多賀大社
	浅草寺・浅草神社	○		延暦寺・日吉東照宮	○
	龍泉寺		京都	清水寺	○
	王子神社			教王護国寺	○
	諏訪神社（新宿区）			知恩院	○
	井草八幡宮			仁和寺	○
神奈川	大山寺			山城離宮八幡宮	
静岡	三嶋大社			石清水八幡宮	○
	久能山東照宮	○	奈良	長谷寺	○
	静岡浅間神社		島根	日御碕神社	○
	五社神社・諏訪神社				

1：日大理工・教員・建築、2：日大理工・院（前）・建築

事例が少ないことは明らかである。

つまり家光期では、本堂・本社以外に多数の堂舎が点在する境内をつくるのが共通して行われ、家光期造営以前にこのような境内構成を持たなかった社寺に対しては、新堂舎の付加を行ったと考えられる。

4. 二重門・袴腰付鐘楼・輪蔵・塔の整備

家光期造営社寺では、二重門、袴腰付鐘楼、輪蔵、塔の内 3 つ以上を境内に持つ事例が多い。新堂舎として二重門・袴腰付鐘楼・輪蔵・塔が加わった社寺に着目すると、日光山、東叡山、増上寺、三嶋大社、久能山東照宮、松応寺、仁和寺が挙げられる。上記 7 社寺について、家康・秀忠主導での造営（慶長一元和期）から家光期（寛永一慶安期）までの二重門、袴腰付鐘楼、輪蔵、塔の新規造営状況をみる。慶長一元和期では新規造営された 7 基の内、3 基が二重門、3 基が輪蔵、1 基が袴腰付鐘楼であり、家光期以前の徳川家による造営では、二重門、輪蔵の整備が中心である。寛永一慶安期の状況は全 21 基の内、6 基が袴腰付鐘楼、6 基が五重塔、5 基が二重門、3 基が輪蔵であり、袴腰付鐘楼、五重塔の新規造営数が慶長一元和期に比べ圧倒的に多い。このことから、慶長一元和期以降から徳川家によって二重門、袴腰付鐘楼、輪蔵、塔の新規整備が継続的に行われていたが、特に袴腰付鐘楼・塔の整備は家光期の顕著な特徴と考えられる。

5. 別伽藍の付加

別伽藍の付加は、日光山、喜多院、増上寺で行われた。家光期以前の境内状況が不明な事例も含めると、長楽寺、鳳来寺、滝山寺がある。東照宮勧請と廟所造営がこの事例を占める。家光期以前の徳川家による別伽藍の造営は、日光山（東照宮）、増上寺（安国殿）、知恩院（本堂・集会堂等）で確認できる。このことから、新規の別伽藍を付加し境内に 2 つ以上の伽藍を造営することは、家光期以前から継続して行われているといえる。上記 7 社寺の旧伽藍と新伽藍の軸線をみると、両伽藍の軸線が平行する配置が全ての事例でとら

れている。つまり境内に 2 つ以上平行する主要な軸をつくり、社寺境内に核となる伽藍を複数設けたことを示している。

6. 参道の整備

日光山、増上寺、三嶋大社、清水寺、家光期以前の境内状況が不明な事例を含めると南宮大社で主要参道の整備が行われたことが確認される。参道の新設は、日光山：陽明門・本社唐門間参道一坂下門間、増上寺：台徳院勅額門西一台徳院廟間⁷⁾、三嶋大社：本社東側南北参道、西門・東門を通る東西参道があり、三嶋大社では同時に旧参道（本社後一北側水路西脇間、薬師堂一北側水路西脇間）が廃止され参道が付替わっている。参道の再整備では、清水寺：朝倉堂の小山掘削による轟門北一地主神社間の平坦化、増上寺：御成道拡張、南宮大社：石輪橋東一中山道間参道の拡張がなされている。

7. まとめ

新堂舎を付加し、境内に多数の堂舎を点在させる構成、袴腰付鐘楼・塔の整備に、家光期の整備手法の特徴が表れている。また、新規別伽藍の付加によって 2 つ以上の平行な軸線を境内につくる手法は家康・秀忠期から継続して行われ、東照宮の勧請増加に伴い家光期により推し進められたといえる。

本稿では家光治世下における社寺整備の手法について概観したが、これらの整備手法がどのように組合せて用いられたかなどについて、配置図を用い境内構成の分析など詳細な検討を行う必要がある。

8. 註及び参考文献

- (1) 光井渉「江戸時代の寺院と神社」（文化庁歴史建造物調査研究会 編著『建物の見方・しらべ方 江戸時代の寺院と神社』ぎょうせい、1994 年）
- (2) 内藤昌「江戸の都市と建築」（『江戸図屏風』別巻、毎日新聞社、昭和 47 年）
- (3) 光井渉『近世社寺境内とその建築』中央公論美術出版、平成 13 年
- (4) 家光治世の時期は神仏習合の時期であったが、現在は明治期の神仏分離により境内建物の所属が寺院と神社に分かれている。本稿では明治期以降の所属を分けず 1 件とする。
- (5) 家光期造営時の状況を示す境内絵図（三嶋大社宝物館所蔵）では、本殿・拜殿や舞殿までを取り囲む

廻廊・瑞垣内と総門から楼門までの一帯、総門脇の門一薬師堂参道東に諸末社がある。この内廻廊・瑞垣内と総門一樓門一帯の諸末社は、鎌倉後期には存在が確認されるが（『一遍聖絵』第六巻）、脇門一薬師堂東の諸末社の創建年代は確認できず、家光期造営時に創建された可能性も考えられる。（6）浅草寺の諸末社の創建年代が確認できず、新規堂舎の付加の事例に相当するか保留としている。（7）参道の造営年代は（内藤：昭和 47）に依拠している。



図 1. 日光東照宮寛永 13 年時 図 2. 清水寺寛永 10 年時境内

境内 橙色：寛永 13 年造営時の新規堂舎